

大学生柔道部員における柔道 MIND の理解度と 能力向上に関する研究

林 弘典¹⁾ 横山 喬之²⁾ 石川 美久³⁾ 生田 秀和⁴⁾ 田中 勤⁵⁾

A Study on the Improvement of Understanding and Ability of Judo MIND among University Student Judo Club Members

Hironori HAYASHI Takayuki YOKOYAMA Yoshihisa ISHIKAWA
Hidekazu SHODA Tsutomu TANAKA

Abstract

This study examined the extent to which university student judo club members understand the Judo MIND and the extent to which they perceive improvement in their abilities. A questionnaire was administered to 116 university student judo club members regarding their understanding of the Judo MIND and improvement in Judo MIND ability. As a result, the following was found.

1. Approximately 77-90% of the university students did not understand “M (Manners),” “I (Independence),” “N (Nobility),” and “D (Dignity).”
2. There was no significant difference in the improvement of the ability of “M,” “I,” “N,” and “D” among university students.

To extend the understanding of the Judo MIND, it is important that university student instructors routinely teach “M,” “I,” “N,” and “D” in the future. To this end, it is necessary to deepen the understanding of the Judo MIND among instructors by administering lectures and examinations on the Judo MIND at instructor qualification workshops. It is necessary to deepen the understanding of the Judo MIND among university student judo club members by administering lectures and examinations on the Judo MIND at instructor qualification workshops.

Key words : Judo MIND, Manners, Independence, Nobility, Dignity, University Student
キーワード : 柔道 MIND, 礼節, 自立, 高潔, 品格, 大学生

1) スポーツ学部 2) 摂南大学 3) 大阪教育大学 4) 大阪体育大学 5) 奈良学園登美ヶ丘高等学校

I 緒言

全日本柔道連盟個人登録者は、2004年の202,025人が2020年には121,532人となり、16年間で80,493人(年間5,030人)が減少している(全日本柔道連盟, 2021)。つまり、2004年から39.8%の登録者がいなくなったことになる。そのような中で2021年に開催された東京オリンピックにおいて、日本柔道は金メダル9個、銀メダル2個、銅メダル1個の計12個のメダルを獲得して好成績を収めたが、柔道人口の激減に歯止めを掛けることはできていない。

柔道人口の激減の原因として、少子高齢化、全日本女子柔道ナショナルチームにおける暴力・ハラスメント問題(全日本柔道連盟, 2013)、頭部外傷や頸椎損傷などの重大事故(内田, 2013)、コロナウィルスの影響などが考えられる。柔道人口を増やす1つの方法として、テレビなどのマスメディアやSNSを使ってオリンピックや世界選手権などにおける日本選手の活躍を広報し、子どもたちに柔道を始めてもらうことが挙げられる。しかし、競技スポーツの世界において、一部の者しか大会で活躍することはできない。したがって、大会で活躍できなかったとしても、柔道を継続することに教育的価値(講道館, 1964; 講道館, online)があることを社会にアピールし、柔道を行う価値や意義を示すことが非常に重要である。

全日本柔道連盟は、柔道MINDプロジェクト特別委員会を発足させて、Manners(礼節)、Independence(自立)、Nobility(高潔)、Dignity(品格)の4つを掲げて柔道の教育的価値を広める活動をしている(全日本柔道連盟, 2014)。この柔道MINDは、前述の4つの英単語の頭文字を取って命名されたものであり、柔道創始者である嘉納治五郎師範の教えの精神、柔道の心に立ち返ろうという思いが込められている。具体的な目標として、Manners(以下、「M」と略す)では、礼儀

を尽くすこと・相手を尊重すること、Independence(以下、「I」と略す)では、独立立ちすること、Nobility(以下、「N」と略す)では、正しいことを考え行うこと・気高さがあること、Dignity(以下、「D」と略す)では、その人に感じられる品があること・気高さがあることが求められている(宮嶋, 2015)。

柔道MIND活動を行っているにも関わらず、柔道界では依然として暴力・ハラスメントが行われている(川戸ほか, 2017)。近年では、不適切な指導(危険な行為の容認)が1件、不適切な指導(暴力)2件、わいせつ行為2件に対する懲戒処分が報告されている(全日本柔道連盟, 2020b, 2020c, 2020d)。この現状から、指導者は柔道MINDを理解していないのではないかと危惧される。したがって、指導者の不祥事を根絶し、柔道MINDを備えた適切な指導を行うことのできる指導者の育成が急務である。特に、中学生や高校生の教員などの指導者となって柔道を指導する可能性のある大学生は重要な存在である。しかし、柔道を行っている大学生に柔道MINDがどのくらい理解されているか、柔道の教育効果によって柔道MINDの能力向上がどのくらい実感されているかを明らかにした研究は存在しない。

そこで本研究の目的は、大学生柔道部員が柔道MINDをどのくらい理解しているか、その能力向上をどのくらい実感しているかを検証することとした。

II 方法

1. 対象者・調査時期

本研究は大学生柔道部員を対象とした。対象者には、本研究の目的や方法などを説明して同意を得た。本研究は、びわこ成蹊スポーツ大学学術研究倫理専門委員会承認されたものである(成ス大第43号)。

2021年7～10月にアンケートを実施し、直接もしくは郵送によって回答を回収した。有効回答者数は116名であり、そのうち男子

は 113 名 (97.4%), 女子は 3 名 (2.6%) であった。

2. 質問項目

柔道五段以上かつ A 指導者ライセンス保持者 5 名が「柔道 MIND」の習熟度に関する質問項目を検討した。検討資料は、柔道 MIND に関する研究 (田中ほか, 2021), 柔道 MIND の前身である柔道ルネッサンスに関する研究 (山田ほか, 2014, 2015, 2016), 全日本柔道連盟が作成した「柔道の未来のために 2020 年 第 5 版 (全日本柔道連盟, 2020a)」における「初心者練習プログラム」「初心者練習めあて」「柔道 MIND のポスター」とした。

(1) 柔道 MIND の理解度

「M」「I」「N」「D」の頭文字が示す言葉を

知っているかについて「はい」「いいえ」で回答させた。「はい」の回答者には、頭文字を含めたスペルを記述させた。その際、記述は英語あるいは日本語のどちらでも良いこととした。また、「はい」と回答してスペルを正しく書くことのできた者だけを理解している者と判断した。つまり、「はい」と回答してスペルを間違った場合は「いいえ」の回答とした。

(2) 柔道による「M」「I」「N」「D」の能力向上

柔道によって前述した検討資料の「M」「I」「N」「D」に示されていることができるようになったかどうかを質問した (表 1)。「わからない」「ほとんど思わない」「あまり思わない」「やや思う」「かなり思う」の選択肢から回答させた。

表 1 柔道による「M」「I」「N」「D」の能力向上に関する質問項目

「M」の能力
(1) 柔道によって、礼法ができるようになりましたか？
(2) 柔道によって、あいさつができるようになりましたか？
(3) 柔道によって、礼儀作法を守ることができるようになりましたか？
(4) 柔道によって、約束事を守ることができるようになりましたか？
(5) 柔道によって、マナーを守ることができるようになりましたか？
(6) 柔道によって、みんなが気持ちよくすごせるために必要なことができるようになりましたか？
(7) 柔道によって、美しい礼ができるようになりましたか？
「I」の能力
(1) 柔道によって、自ら真剣に取り組む姿勢が身につきましたか？
(2) 柔道によって、自ら進んで稽古ができるようになりましたか？
(3) 柔道によって、自ら進んで行動ができるようになりましたか？
(4) 柔道によって、自分で考え判断して行動できるようになりましたか？
(5) 柔道によって、自分の意思で行動できるようになりましたか？
「N」の能力
(1) 柔道によって、謙虚 (控えめでつつましやかなさま) になれましたか？
(2) 柔道によって、誠実になれましたか？
(3) 柔道によって、相手への思いやりの行動や言動ができるようになりましたか？
(4) 柔道によって、正しいことを考え実行できるようになりましたか？
(5) 柔道によって、どんな時も正々堂々ふるまうことができるようになりましたか？
「D」の能力
(1) 柔道によって、立ち居振る舞いが美しくなりましたか？
(2) 柔道によって、周囲に配慮した行動ができるようになりましたか？
(3) 柔道によって、礼儀正しい言葉遣いができるようになりましたか？
(4) 柔道によって、誰からも尊敬される生き方ができるようになりましたか？
(5) 柔道によって、誰からも尊敬される人になることができましたか？

3. 分析方法

回答について無記入のデータを除外した。柔道MINDの理解度に関して、 χ^2 検定を行って「はい」「いいえ」の回答数の割合を比較した(田中, 1996; 田中・山際, 1989)。柔道MINDの能力向上に関しては、「0点=わからない」「1点=ほとんど思わない」「2点=あまり思わない」「3点=やや思う」「4点=かなり思う」とし、各項目で平均値を算出した。そのデータを基に一元配置分散分析を行った。その結果、有意な差があった場合、Turkeyの多重比較検定を行った。なお、Cronbachの α 係数を算出して「M」「I」「N」「D」における質問項目の一貫性を確認した。統計処理には、SPSS Statistics 25を使用し、有意水準は5%未満とした。

Ⅲ 結果

1. 「M」「I」「N」「D」の理解度

柔道MINDの「M」「I」「N」「D」の頭文字の意味を知っているかについて「はい」「いいえ」で回答させた。その結果、「M」の回答について、「はい(27名, 23.3%)」「いいえ(89名, 76.7%)」であった(図1)。「I」の回答について、「はい(15名, 12.9%)」「いいえ(101名, 87.1%)」であった(図2)。「N」の回答について、「はい(14名, 12.1%)」「いいえ(102名, 87.9%)」であった(図3)。「D」の回答について、「はい(12名, 10.3%)」「いいえ(104名, 89.7%)」であった(図4)。すべての頭文字に関して、意味を理解していない者の割合が有意に高かった($p < 0.05$)。

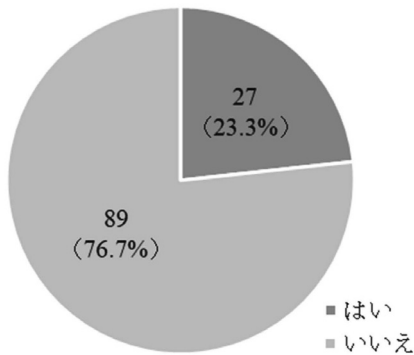


図1 大学生 (n = 116) における「M」の理解度

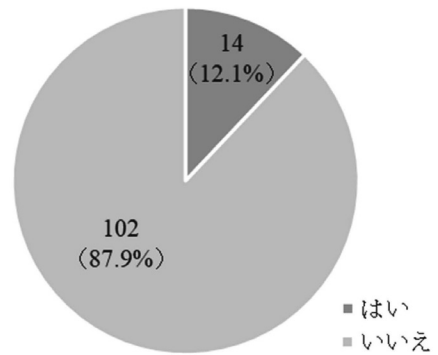


図3 大学生 (n = 116) における「N」の理解度

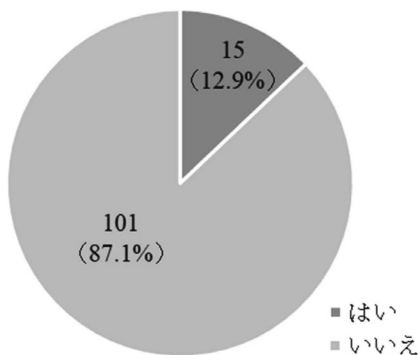


図2 大学生 (n = 116) における「I」の理解度

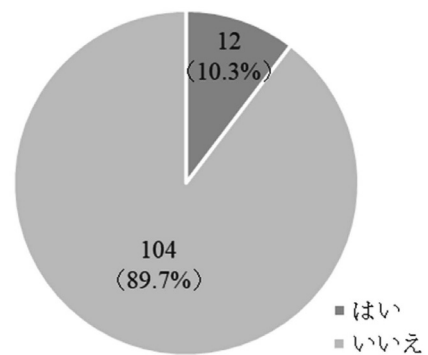


図4 大学生 (n = 116) における「D」の理解度

2. 柔道による「M」「I」「N」「D」の能力向上の比較

関する結果を示した。「M」「I」「N」「D」において一元配置分散分析を行った結果、有意な差はなかった ($F(3,460) = 1.895$) (図5).

表2に「M」「I」「N」「D」の能力向上に

表2 柔道による「M」「I」「N」「D」の能力向上について

「M」の能力		平均	SD
(1) 柔道によって、礼法ができるようになりましたか？		3.64	0.67
(2) 柔道によって、あいさつができるようになりましたか？		3.67	0.68
(3) 柔道によって、礼儀作法を守ることができるようになりましたか？		3.65	0.66
(4) 柔道によって、約束事を守ることができるようになりましたか？		3.44	0.81
(5) 柔道によって、マナーを守ることができるようになりましたか？		3.53	0.76
(6) 柔道によって、みんなが気持ちよくすごせるために必要なことができましたか？		3.40	0.78
(7) 柔道によって、美しい礼ができるようになりましたか？		3.56	0.76
合計		3.56	0.60
「I」の能力		平均	SD
(1) 柔道によって、自ら真剣に取り組む姿勢が身につきましたか？		3.49	0.72
(2) 柔道によって、自ら進んで稽古ができるようになりましたか？		3.45	0.76
(3) 柔道によって、自ら進んで行動ができるようになりましたか？		3.41	0.74
(4) 柔道によって、自分で考え判断して行動できるようになりましたか？		3.41	0.79
(5) 柔道によって、自分の意思で行動できるようになりましたか？		3.47	0.76
合計		3.45	0.68
「N」の能力		平均	SD
(1) 柔道によって、謙虚(控えめでつましやかなさま)になれましたか？		3.36	0.84
(2) 柔道によって、誠実になれましたか？		3.36	0.85
(3) 柔道によって、相手への思いやりの行動や言動ができるようになりましたか？		3.49	0.75
(4) 柔道によって、正しいことを考え実行できるようになりましたか？		3.45	0.76
(5) 柔道によって、どんな時も正々堂々ふるまうことができるようになりましたか？		3.38	0.84
合計		3.41	0.72
「D」の能力		平均	SD
(1) 柔道によって、立ち居振る舞いが美しくなりましたか？		3.30	0.83
(2) 柔道によって、周囲に配慮した行動ができるようになりましたか？		3.47	0.79
(3) 柔道によって、礼儀正しい言葉遣いができるようになりましたか？		3.51	0.72
(4) 柔道によって、誰からも尊敬される生き方ができるようになりましたか？		3.27	0.92
(5) 柔道によって、誰からも尊敬される人になることができましたか？		3.17	1.00
合計		3.34	0.75

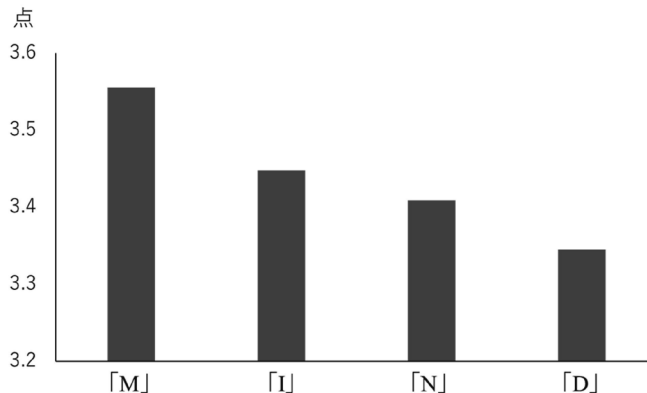


図5 「M」「I」「N」「D」の能力向上の比較

なお、Cronbach の α 係数は、「M」= 0.92、「I」= 0.94、「N」= 0.94、「D」= 0.92 であり、各質問の一貫性が認められた。

IV 考察

1. 「M」「I」「N」「D」の理解度

多くの大学生は「M」「I」「N」「D」を理解できていないことが分かった。また、「M」「I」「N」「D」の順に理解度が低いことが分かった。

対象者の大学生は 18～22 歳である。高校卒業レベルの英語力があれば、柔道 MIND における Manners (礼節)、Independence (自立)、Nobility (高潔)、Dignity (品格) は理解できると考えられる。また、英語が苦手であっても、カタカナや漢字、平仮名でも回答できる。さらに、2013 年に柔道 MIND の活動が始まった時、彼らは 10～14 歳である。全日本女子柔道ナショナルチームの暴力・ハラスメント問題や柔道の重大事故が社会的な問題になった頃であり、柔道 MIND 活動を頻繁に経験したと推測される。しかし、ほとんどの者が「M」「I」「N」「D」の意味を理解できていなかったことから、柔道 MIND という言葉を耳にしたことがあるが、「M」「I」「N」「D」の個々の意味は浸透していなかったと考える。

当時、大会等で柔道 MIND のスピーチが行われていたが、柔道を通じた良い経験話として聞き流されていたかもしれない。日頃から「M」「I」「N」「D」の意味を理解させ、それに基づいた具体的な行動を指導していなかったことが原因であると考えられる。また、「精力善用」「自他共栄」「嘉納師範遺訓」のような日本語ではなく、柔道 MIND のように英語にしたことも浸透しなかった原因であると考えられる。

このように、柔道の教育面がおろそかになっている背景には、柔道の競技化（スポーツ化）が影響していると考えられる。したがって、小さな頃から柔道の理念や柔道 MIND

を教える時間を設け、指導を繰り返すことが必要である。また、全日本柔道連盟と講道館は協力して、昇級・昇段試験や指導員資格の講習会において、柔道の理念や柔道 MIND の試験を課すことによって、それらの理解度を高める努力をする必要がある。

「M」「I」「N」「D」の順に理解度が高くなった理由について、Manners (礼節) という英語は、日本では「マナー」として一般的に使われているからである。また、日常生活において、Independence (自立) という言葉は Nobility (高潔) や Dignity (品格) よりも多く耳にする言葉であると思われる。しかし、Nobility (高潔) や Dignity (品格) という言葉は使われることがかなり少ないと考える。特に大学生にとっては聞き慣れない言葉であり、難解な言葉であったのかもしれない。

今後、柔道 MIND の理解を広めるためには、大学生の指導者が日常的に「M」「I」「N」「D」の指導を行うことが重要である。そのためには、指導員資格の講習会で柔道 MIND の講義や試験を課すことによって、指導者に柔道 MIND の理解をさせることが必要である。また、大学生が受講する指導員資格の講習会において、柔道 MIND の講義や試験を課すことが必要である。

2. 柔道による「M」「I」「N」「D」の能力向上の比較

「M (平均点 3.56)」「I (平均点 3.45)」「N (平均点 3.41)」「D (平均点 3.34)」の能力向上に有意な差が見られないことが明らかとなった。また、これらの平均点は、前述の理解度「M (23.3%)」「I (12.9%)」「N (12.1%)」「D (10.3%)」と同様に、「M」「I」「N」「D」の順に平均値が低くなっていた。

「M」「I」「N」「D」の能力向上に有意な差がなかった理由は、大学生は柔道を通して精神的にも肉体的にも成熟しているからである。したがって、それぞれの項目の能力が高い水準（最高 4 点中、3.34～3.56 点）まで向

上したことを実感しているために、差が見られなかったと考えられる。このことから、大学生には、柔道の教育効果が現れていると考えられる。

「M」「I」「N」「D」の順に平均値が低くなった理由について、「M」は日常生活や柔道でも自然と行っているために、平均値が高くなったからであると考えられる。「I」については、自分自身のことであり、比較的実感しやすかったからであると思われる。しかし、「N」「D」については、自分の行動に対する他人の評価であり、能力が向上したことを実感しにくかったからであると推察される。したがって、「N」「D」の能力が向上したかどうかを指導者が評価して伝えることや確認させる機会を作ることによって、「N」「D」の能力向上を実感させるように指導し、評価することが重要であると考えられる。

今後の課題として、精神的にも肉体的にも成熟していない高校生や中学生において、「M」「I」「N」「D」の能力の向上を実感しているかについて明らかにする必要がある。また、指導者から「M」「I」「N」「D」の具体的な指導を受けているかどうかを検証することが重要である。なぜなら、柔道界では、依然として指導者による暴力・ハラスメントが深刻な問題となっており、社会からの信用や信頼を失っているからである。そのような指導ではなく、柔道 MIND に基づいて適切な指導が行われていることや低年齢層にも柔道の教育効果があることを実証していくことが社会の信用や信頼を回復させることにつながると考える。

V 総括

本研究は、大学生柔道部員が柔道 MIND をどのくらい理解しているか、その能力向上をどのくらい実感しているかを検証した。柔道 MIND の理解度、柔道 MIND の能力向上について、大学生柔道部員 (116 名) にアンケートを実施した。その結果、以下のことが

明らかとなった。

1. 約 77～90%の大学生は「M」「I」「N」「D」を理解できていなかった。
2. 大学生における「M」「I」「N」「D」の能力向上に有意な差は見られなかった。

今後、柔道 MIND の理解を広めるためには、大学生の指導者が日常的に「M」「I」「N」「D」の指導を行うことが重要である。そのためには、指導員資格の講習会で柔道 MIND の講義や試験を課すことによって、指導者に柔道 MIND の理解を深めることが必要である。また、大学生も受講する指導員資格の講習会において、柔道 MIND の講義や試験を課すことが必要である。

文献

- 川戸湧也・岡田弘隆・増地克之・小野卓志 (2017) 柔道指導現場における「体罰」・「ハラスメント」ならびに「ドメスティックバイオレンス」の実態調査：大学生柔道選手を対象として。武道学研究, 49 (3) : 183-191.
- 講道館 (1964) 嘉納治五郎 (2 版)。布井書房：東京。
- 講道館 (online) 柔道の教育的価値。http://kodokanjudoinstitut.org/doctrine/word/kyouikutekikachi/, (参照日 2022 年 10 月 18 日)。
- 宮嶋泰子 (2015) 柔道マインド世界に広がる！。https://www.tv-asahi.co.jp/reading/kokontouzai/2716/, (参照日 2022 年 11 月 28 日)。
- 田中敏 (1996) 実践心理学データ解析。新曜社：東京。
- 田中敏・山際勇一郎 (1989) 新訂ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法 (2 版)。教育出版：東京。
- 田中勤・石川美久・横山喬之・正木嘉美・生田秀和・林弘典 (2021) 「柔道 MIND」活動に関する意識調査—指導者を対象として—。関西武道学研究, 30 (1) : 21-27.
- 内田良 (2013) 柔道事故。河出書房新社：東

- 京.
- 山田利彦・金丸雄介・石井孝法・福見友子・上水研一郎・金野潤・柏崎克彦（2014）柔道ルネッサンス活動意識調査～2010年柔道ルネッサンスフォーラム参加者を対象に～. 了徳寺大学研究紀要, 8: 79-87.
- 山田利彦・金丸雄介・石井孝法・越田専太郎・小菅亨・福見友子・上水研一郎・金野潤・柏崎克彦（2015）柔道ルネッサンス活動意識調査～2010年全国高校総合体育大会柔道競技監督会議出席者を対象に～. 了徳寺大学研究紀要, 9: 17-31.
- 山田利彦・金丸雄介・石井孝法・上水研一郎・金野潤（2016）柔道ルネッサンス活動に関する意識調査—2010年全日本実業柔道個人選手権大会代表者会議出席者を対象に一. 了徳寺大学研究紀要, 10: 31-44.
- 全日本柔道連盟（2013）「柔道女子暴力的指導問題に対する第三者委員会」の答申を受けて（13.3.21）. <https://www.judo.or.jp/p/992>,（参照日2022年11月25日）.
- 全日本柔道連盟（2014）柔道MINDプロジェクト特別委員会の発足について. <https://www.judo.or.jp/p/32712>,（参照日2022年11月25日）.
- 全日本柔道連盟（2020a）柔道の未来のために 柔道の安全指導 2020年（第5版）. 全日本柔道連盟：東京.
- 全日本柔道連盟（2020b）懲戒処分の実施について（2020年09月29日）. <https://www.judo.or.jp/news/341/>,（参照日2022年11月11日）.
- 全日本柔道連盟（2020c）懲戒処分の実施について（2020年02月28日）. <https://www.judo.or.jp/news/686/>,（参照日2022年11月11日）.
- 全日本柔道連盟（2020d）懲戒処分の実施について（2020年12月21日）. <https://www.judo.or.jp/news/4686/>,（参照日2022年11月11日）.
- 全日本柔道連盟（2021）会員登録. <https://www.judo.or.jp/sport-promotion/member/>,（参照日2022年10月17日）.